

新鋭ころろシリーズ 7 藤貫陽一詩集『緑の平和』
立ちあがりのひたむきさ 佐相 憲一

〈超氷河期の情景は苦い。放射能の時代は辛い。現代社会の荒波にさらされて、それでも人間を信じよう。孤高の精神がふと見せるさりげない優しさ。屈折し、反逆しながら、ひたむきに世界と向きあう詩のころろ。足もとの苦悩から宇宙感覚まで、個性的な第一詩集。〉

藤貫陽一さんの詩集の広告文にそう書いた。刊行されたばかりだが、読者の方々からこの詩集がよかったと、こちらにも声をいただいている。作者本人のもとにも次々と共感の声が寄せられているらしく、藤貫さんは電話でうれしそうに話してくれた。その朴訥とした会話とはにかんだ笑顔には、彼の人がにじみ出ている。

ベランダに 落ちていた
ころもりの 赤ちゃん

逃がしてやったら

飛んでった

(作品「ころもりになれよ」)

一九七二年生まれの人が経て来た時代は決して明るくない。

厳しいばかりの社会現実と人生のものがき・苦悩。ひどいことばかりだと言ってしまうえばそれまでだが、作者はその縁で落ち込んだままではいなかった。
立ちあがりのひたむきさ、そこにこの詩集が人の胸をうつものがある。

一バレル九十九ドル
まで迫った年の冬
だったでしょうか

甥っ子と 縁側で

たつぶり 日向ほっこを
百ドル分は したでしょうか

夕方になって

目やにがひどいので
お湯で顔を洗わせました

迎えが来て 甥っ子は

ママに怒られた

袖口がびっしょりじゃない

脱ぎなさい

外に出て

寒いよう

悪かったね

ママに温めて

もらいなさい

寒かった日のことを

いつか思い出すように

おじさんは その夜

まだまだ修行が足りないよ

水シャワーを浴びましたよ

(作品「寒いよう」)

本当に優しい人はうまく生きていかれず、疎外される。そんな風潮の日本現代社会が反映してしまっているが、この人はそれでも他者を思いやり、自らを高めようとしている。それが偽善的な匂いなく、ごく自然な形で伝わり、人間的な「詩情」がじわあつとひろがるのだ。

第一章「五十年カレンダー」は、この「寒いよう」から

「五十年カレンダー」「市民楽団コンサート」「大学の実験室」

「魔法使いの女」と、自他との対話が親しみ深い詩群で始まる。

続いて人生の思いの詩群が続く。ラストの「無名詩人働く」

は、ユーモラスなタイトルとは裏腹に、超氷河期と社会危機・

精神危機の時代の実感が切実である。

第二章「冬休み」には、時代と個人の精神と社会状況が刻印

されている。I章でこの詩人の詩に興味をもってくれた人に、

さらに突っ込んで、作者が何を考え、どんなイメージの内面を

もち、社会の中で何を発しているのかが提示されるのである。

作品「機関車よ」「白い兎」「黒い情念」「風船」「配給」

「宴」には、それぞれに複雑な内面が作品化されている。文学

性に富むそれらには、状況の中での個人の声リアルであり、

考えさせるものがある。

さまざまなものを背負って、詩世界は現代の政治的矛盾にまで

入って行く。作品「91遊び」「限定句」など。

そして、そのような矛盾だらけの世の中で頑張って生きている

人々の草の根の姿へと視点が移って、作業所の人間関係を思

わせる作品「私のコースター」の優しさ、受験に追われる若者

のことを共感的な批評性で描いた作品「冬休み」で結ばれる。

冬休みに

天才を 量産できる

わけもないのに

冬休みの生徒にとって

今が追い込みだ

将来の夢や希望を祈る前に

除夜の鐘は打たれるのだ

(作品「冬休み」)

第三章「緑の平和」では、そんな人間性豊かな詩人が、社会と科学の矛盾に立ち向かい、ペンの力で世に語りかけている。宇宙的視野で放射能の深刻な現実を見つめる。

この危機的時代の科学のあり方。研究は何のためにあるのか。作品「宇宙に捧ぐ」「人間の比喩」などで、作者は現代文明の根本にメスを入れている。そして、自ら茨城県という危険地方に住む作者は、福島原発事故を受けた放射能の時代に、作品「私のセンサー」「僕はそれを知りたいの」「緑の平和」「律すること」「二十一世紀の第一歩」などで、危機・欺瞞とそこからの脱却を展望する自然エネルギーのことなどを書いていく。

詩集ラスト三作品「憧憬」「コーヒー豆の秘密」「宇宙に飛んでけ」は、一番大切なものは人間の心なのだ、という声を届けてくれる。

そして、日常生活も科学文明も社会システムも人生も、明るい方への展望は、宇宙の広大な時空の中で、私たち一人一人の心の対話から生まれることを知らせてくれるのだ。

我々は彼らを追放するために
研究をさせておく

彼らはロケットが どこまで
飛んでゆくか計算できて

自身の運命を
想像することができない

近代は光なのか闇なのか
人間は塵なのか君臨するのか
我々の生活は一瞬なのか意義があるのか

私はこの詩を三十五歳で書き

第二第三の読者に

会いにゆかねばならないのだ

(作品「宇宙に飛んでけ」)

こうして現れた新しい才能・藤貫陽一さん。彼は相変わらず、はにかんだ笑顔で、控えめな人だ。その生活は決して好転しているわけではない。でも、だからこそ、そんな苦悩のただ中から届けられたこの詩集の言葉は、時に優しく、時に寂しく、時に屈折した形で、あるいは、時に楽しく、時に力強く、同じ時代を生きた私たちの胸の深くにしみこんでくるのだろう。抑制されたほろ苦い抒情と、独自の時代感覚の批評性。ここに、生きていく人の、生きていく言葉がある。